アングル Angle

忘れられた昔を語る
「学而池（がくじいけ）」の碑、ここに

ロング・ロング・アゴウ。飯田長姫城二の丸跡の旧校舎から、ここ上郷村高松原に新築の鉄筋白亜3階建て校舎へ引っ越して数年を経た昭和7年の夏休み。

飯田中学31回生が全員そろって驚異の大作業に着手しました。校庭の地面軟弱、雨後の泥濘を改良するため、天龍の川砂採取運搬を繰り返し、同時に記念館東側の空き地には清冽な池の造成も成し遂げました。

池の名は「学而池」。国漢担任の細川馨先生が命名。「学而不思則罔（学ビテ思ワザレバ即チクラシ）」論語・為政「いくら勉強しても自分自身で深く考えないと駄目です」が典拠。池畔には名号碑が建てられました。まさに中学31回生154名が、最後の夏休みを返上して連日流し続けた汗水結晶の卒業記念事業でした。

さて歳月めぐりて幾春秋。

いつしか「学而池」は涸渇し埋没されて姿を消し、自転車置き場やらテニスコートに変貌。すっかり忘却されてしまった「学而池の由来」を、せめて文書に書き残すべしと、31回卒業生有志の悲願が叶ったのは昭和43年春。名付け親の細川馨先生（大阪樟蔭女子大学学長）に執筆と揮毫を依頼し、届けられた文書は額装されて同窓会の貴重資料に加わりました。

さてまたそれから茫々幾春秋――。

令和元年5月の某日、筆者は同窓会本部事務局の小林朱美さん（高19回）に電話で『学而池由来』文書の撮影希望を伝え、今や不明の池畔名号碑についても話が及びました。「それは全く知りませんので先輩方にお聞きして後日報告します」と彼女、さっそく聞き込みを続けて下さり遂に判明。その報告を受けた小生は驚喜して帰郷、彼女の案内で学而池の碑と感激の初対面を果たしました。朱美さんよ、有難う。

現地は東門の北方約20メートル、学校敷地の境界土手で、民有地のブロック塀ぎりぎりに背を接し西向きに立つ凛々しい姿でした。

知る人ぞ知る。おおかたの同窓生も知らず、或は忘却された「学而池の碑」の孤影に、優しい愛の瞳、愛の言葉を捧げよう。

碑の高さは150㎝ほどある

牧内雪彦（中47・高1回）